

I 研究主題

確かな学力を身に付けさせるための授業の在り方
～国語科、算数・数学科における指導の工夫・改善を通して～

II 主題設定の理由

日向市では、平成17年3月に日向市小中一貫教育基本計画、また同時期に学校教育推進のための基本方針として、「ひゅうが学校教育プラン」を策定し、「学力向上、豊かな心の育成、体力向上、ふるさと教育、体験活動、食に関する指導」を推進することを宣言し、その主たる方策として、小中一貫教育の推進に努めることとした。

この施策を受けて、一体型、連携型ともに、小中一貫教育による9年間の系統的・継続的な指導計画による授業等の工夫・改善を図ることによって、児童一人一人に確かな学力を身に付けさせることを目標とし、特に小・中学校間において分断することのない滑らかな接続が可能となる一貫したきめ細かな学習指導について配慮することとした。

これまで本研究所では、小中一貫教育を推進するために、平成19・20年度には、義務教育9年間を見通した教育課程の工夫など、ソフト面の連携システムの開発を中心とした研究、平成21年度にはその検証のための授業研究を中心とした実践的な研究に取り組んできた。今後も継続して、学力の確実な定着を図るために必要となる授業づくりの基礎・基本、すなわち教師が日々の授業を改善するための拠り所となる実践的な研究をさらに深めていく必要がある。

そこで、本年度は、小中一貫教育を基盤としながらも、児童生徒に確かな学力を身に付けさせるために、国語科、算数・数学科における新学習指導要領の趣旨を踏まえた、真に学力向上や指導力向上に資する授業レベルでの実践的な研究に取り組むこととした。

III 研究目標

- 新学習指導要領の趣旨を生かした、真に学力向上や指導力向上に資する授業の在り方について究明する。
- 小中一貫教育による9年間の系統的・継続的な指導について、具体的な工夫・改善の在り方について究明する。

IV 研究仮説

小・中学校の国語科、算数・数学科の指導方法において、教科の特性に応じた連続性・接続性のある問題解決的な学習の在り方を確立し、模擬授業や研究授業を通して工夫・改善を図っていけば、真に学力向上や指導力向上に結びつく授業の在り方を究明することができるであろう。

V 研究組織



VI 研究の実際

1 国語科研究班

本市では、「ひゅうが学校教育プラン」を策定し、小中一貫教育を中心とした「日向市ならではの教育」の具現化に努めている。特に国語科教育においては、論理的な読解力・表現力を育てる指導を義務教育9年間を通して、系統的・連続的に行うこととしている。

研究を進めていく中で、本市児童生徒の「文章をもとに自分の考えを明確にした上で、話し合ったり、まとめたりする力が不足している」という実態が明らかになってきた。また、今年度の各種学力調査の結果（小学4年以上）を見ると、理由の記述や人物の意見と根拠の把握などに課題があることが明らかになった。

そこで、本年度は上記の現状を踏まえ、説明的な文章教材において読解力育成を図るための研究を進めることとし、研究主題・副題を以下のように設定した。

(1) 研究主題および副題

論理的な読解力を育てる国語科指導の在り方
～説明的な文章教材の読解指導の工夫を通して～

(2) 研究の仮説

説明的な文章教材の指導において、育てたい言語能力を明確にした教材分析を行い、思考を深める発問とそれに応じた書く活動や話し合い活動を充実させたり、計画的に指導計画や学習指導過程に位置付けたりすれば、児童生徒は論理的な読解力を身に付けることができるであろう。

論理的な読解力とは… 叙述を基に、文章の内容や表現、書き手の意図などを相互に関連付けて読む能力。さらには文章を読んで考えたことをまとめたり、交流を通して広げたり、深めたりする能力。

(3) 研究内容

- ア 教材分析の充実
- イ 指導計画及び学習指導過程の明確化
- ウ 思考を深める発問の工夫
- エ 書く活動の計画的な位置付け
- オ 話し合い活動の充実

(4) 研究の実際

- ア 教材分析の充実

説明的な文章の指導においては、教材文の文章構成や指導すべき言語事項などを指導者がきちんと捉えておく必要がある。言語に着目し、かつ焦点化された指導を行うためにも、教材分析を充実させることは必要不可欠なものである。そこで、以下の観点と要素に沿って教材分析を行い、教材分析表にまとめた。

観 点	要 素
① 文章構成	○ 形式段落 ○ 意味段落 ○ 要旨 ○ 相互関係 ○ 文章構成図
② 言語事項	○ 重要語句 ○ 難語句 ○ 文法
③ 指導上の留意点	○ 読解に必要な手立て ○ 児童生徒への支援 ○ 育てたい言語能力（読むことを中心に表記）

イ 指導計画及び学習指導過程の明確化

新学習指導要領においても児童生徒が自ら学び、課題を解決していく能力の育成が重視されており、総則においても、見通しを立てた計画的な学習の重要性が述べられている。指導計画や学習指導過程が明確になることにより、児童生徒は見通しをもって学習に取り組むことができ、学習意欲を高めることができると考える。また、小学校、中学校での共通した学習指導過程を用いることにより、学習の連続性をもたせることができる。

(7) 基本的な指導計画

指導計画における基本的な段階を「導入」「展開」「終末」の3段階とした。特に、本研究においては「展開」段階で、論理的な読解力を高めるための指導を進めることが重要であると考えられる。

(i) 基本的な学習指導過程

一単位時間の基本的な学習指導過程を「つかむ」「調べる」「深める」「まとめる」の4段階とした。特に「調べる」「深める」段階における学習活動が、論理的な読解力に直結すると考えられる。書く活動を通して考えを形成したり、話し合い活動により考えを交流し合ったりする学習が中心となる。

ウ 思考を深める発問の工夫

書かれている内容や説明方法について確認するための発問だけでは論理的な読解力は十分に育たない。そこで本研究では、発問を「確認のための発問」と「思考を深めるための発問」に分類し、学習の目標に応じて指導計画に位置付けるようにした。

確認のための 発問	文章の内容や表現がどのように書かれているかを問い、 確実に読み取るための発問
思考を深める ための発問	文章の内容や表現、書き手の意図などを相互に関連付けたり、 <u>文章の前後を振り返ったり</u> しながら読み、自分の考えを深めるための発問

「思考を深めるための発問」に対して答えるためには、教材文の内容をしっかりとらえておく必要がある。そのためには「確認のための発問」が必要となる。両方の発問をバランスよく取り入れていくことが大切である。

(7) 思考を深める発問の実際

思考を深める発問は、その目的や意図を明確にした上で設定する必要がある。本研究において思考を深める発問とは、論理的な読解力を育成する上で必要不可欠なものである。

発問の目的		発問の具体例
内容を深く読み取らせる		○ なぜビーバーは、こんなに立派なダムを作り上げることができるのでしょうか。
教材文への評価	表現のよさや特徴に気付かせる	○ 筆者の述べ方のよさはどのようなところでしょう。 ○ 筆者はなぜこのような表現を使っているのでしょうか。
	構成のよさや特徴に気付かせる	○ 筆者はなぜこの順番で書き進めているのでしょうか。 ○ この段落の有無により、展開はどう変わるでしょう。
	自分の考えや立場を明確にさせる	○ 2つの教材文を読み比べて、どちらの文章がわかりやすいと思いますか。

(イ) 実践例【小2「ビーバーの大工事」における実践】

T : ①「なぜビーバーは、こんなに立派なダムを作り上げることができるのでしょうか。」
C : 家族のビーバーたちも、運んできた木を次々に並べ、石と泥でしっかりと固めていくからです。
C : ビーバーは、夕方から夜中まで、家族総出で仕事を続けるからです。

①の発問は、ビーバーの水にもぐることでできる体の機能や、家族総出で仕事に励む姿などに気付くといった内容を、より深く読み取らせることをねらいとして設定された発問であった。しかし、本発問では、教師の意図する「一度もぐったビーバーは、普通で5分間、長いときには15分間も水中にいるから」という意見を引き出すことができなかった。そこで、②の補助発問を行ったところ、その後の話合いは、以下のように進んでいった。

T : ②「家族で協力して、長い時間かければ、先生にも立派なダムが作れますか。」
C : 作れません。
C : 先生には無理です。先生はビーバーみたいに長くもぐれないからです。
T : ビーバーは長くもぐれるのですか。それはどの文章からわかりますか。
C : もぐれます。それは、「一度もぐったビーバーは、普通で五分間、長いときには十五分間も水の中にいます。」という文章からわかります。
T : そうですね。ビーバーは、こんなにも長い時間、水にもぐることができるから、立派なダムを作り上げることができるのですね。

②の発問により、その後の話合いが活発になり、教師の意図する意見を導くことができた。単発の発問で児童生徒の思考が深まらないことも考えられる。教師は、児童の反応に応じた補助発問を用意しておく必要があることが明らかになった。

エ 書く活動の計画的位置付け

書く活動は、言葉の選択や構成、推敲など活動自体が思考を伴うものである。書くことによって対象についてよく考え、その考えを整理し明確にするという働きを生かし、学習課題を解決したり、分かった事実や自分の考えを改めて認識したりするために書く活動を取り入れることにした。書く活動は、発問の目的や児童生徒の発達段階に応じて、使い分けていかなければならない。発問の目的とそれに応じた書く活動を表にまとめた。

書く活動 発問の目的		サイドライン	枠囲み・記号化	書き抜き	書き込み	書き足し	書き替え	感想	要約	文図	表	絵	吹き出し
		◎	◎							◎	◎	◎	
内容や表現方法の確認		◎	◎							◎	◎	◎	
内容を深く読み取らせる		◎	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎			◎
教材文への評価	表現のよさや特徴に気付かせる	○		○	○	◎	○						
	構成のよさや特徴に気付かせる		○				○	○	○	◎			
	自分の考えや立場を明確にさせる			◎	○		◎			○		○	○

◎：主たる目的として活用可能 ○：発問によっては活用可能

オ 話し合い活動の充実

私たちは、話し合いにより互いの共通点や相違点を知り、物事を決めたり知識を広げたり、練り上げながらよりよいものを創造したりすることができる。国語科の学習においても、友だちと意見を交流させる中で、自分一人では思いつかないような多様な考えに触れたり、話し合いから新たな自分の考えを再構築したりすることができる。

(ア) 話し合いの種類と目的

話し合いは、本時の目標を達成するために行われるものである。しかし、その中身は大きく2つに分けることができる。

「クローズドエンド」の話し合い	「オープンエンド」の話し合い
文章の内容を深く読み取らせたり、表現・構成のよさや特徴について気付かせたりするための「クローズドエンド」の話し合い	自分の考えや立場を明確にした上で、自分の考えを広げたり、深めたりするための話し合い

(イ) 話し合いを充実させるための留意点

話し合いは、自分の考えを明確にしたり、他者の意見と自分の意見を比較したり、さらに自分の意見を新たに再構築したりする上で大切な活動である。そこで、その話し合いを充実させるための留意点を話型例と照らし合わせながらまとめた。

充実のための留意点	話型例
根拠の明確化	発言の際は、考えの根拠を明らかにさせる。根拠は、叙述に即したものでなければならない。 ・～だから～だと思います。 ・～と考える理由は～です。
考えの比較検討 選択・合成 (練り合い)	自分の考えを述べるだけでなく、友だちに対する意見も述べるようにする。自分と友だちの意見とを比較して、同意できることや相違点などを明確にしながら話し合う。 ・Aさんの意見に似ていて、私は～と思います。 ・Bさんと違って、私は～と思います。 ・CさんとDさんの意見をまとめるともっとよくなると思います。
考えの再構築	話し合いの過程を振り返りながら、自分の考えを再び考え直してみる。 ・最初は～だと思ったけれど、考えが～に変わりました。

(ウ) 話し合い形態の工夫

子どもたちが自らの意見を出し合い、友だちと意見を練り合うために、以下のような話し合いの形態を考えた。学級の児童生徒の実態や学習内容を考慮し、どの形態がより効果的か考えなければならない。

話し合いの形態	話し合いの進め方
ペア	隣の席の友だちと対面して話す。発言の機会を保障するとともに、全体での発言に抵抗を感じている子どもが発言しやすい雰囲気をつくる。
グループ	3～6人程度の小集団で話し合う。司会者を決め、その進行に沿って話し合いを進めていく。
学級全体	学級全体で意見を交換し、練り合う。教師が進行役となり、できるだけ多くの意見を引き出し、多様な考えに触れさせるよう配慮する。慣れてくれば児童生徒による進行も考えられる。

(5) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 育てたい言語能力を明確にした教材分析を行い、発問・書く活動・話し合い活動を計画的に位置付けたことにより、児童生徒の深い思考を生む授業を展開することができた。
- 発問の目的に応じた書く活動や話し合い活動を学習指導過程に位置付けることにより、児童生徒の学習意欲及び論理的な読解力が高まった。
- 確認のための発問と思考を深めるための発問との時間のバランスを考慮しながら、単元を通して徐々に思考を深めていけるような指導計画及び学習指導過程を工夫していく必要がある。
- 思考を深めるための発問に対する児童生徒の反応に応じた補助発問を準備し、十分に思考を深めさせていく必要がある。

2 算数・数学科研究班

これまでの諸学力・学習状況調査の結果から、本市児童生徒は、進級するにつれ算数・数学に対する学習への関心・意欲の低下、課題と向き合い自力解決していく問題解決的な学習の学び方が身に付いていないという実態が明らかになった。また、算数・数学の特質を押さえた教材研究を充実させたいという教師のニーズもあった。そこで、問題解決的な学習の指導の在り方を明確にすることや教材研究の充実によって、特に新学習指導要領で求められる数学的な思考力や表現力を高めたいと考え、研究主題・副題を以下のように設定した。

(1) 研究主題および副題

数学的な思考力・表現力を育てる指導の在り方

～問題解決的な学習における工夫・改善を通して～

(2) 研究の仮説

教材研究の充実を図り、問題解決的な学習における指導や算数（数学）的活動を活かした指導の工夫・改善をすれば、児童生徒は意欲をもって取り組み、数学的な思考力や表現力を高めることができるであろう。

(3) 研究内容

- ア 教材研究の充実
- イ 問題解決的な学習指導過程の明確化
- ウ 指導方法の工夫・改善
 - (ア) 学習意欲を高める導入の在り方
 - (イ) 自力解決における教師の手立ての在り方
 - (ウ) 思考を高める指導の在り方
 - (エ) 振り返りににおける学習感想の工夫
- エ 算数（数学）的活動を活かした指導の工夫

(4) 研究の実際

ア 教材研究の充実

児童生徒が分かる・楽しめる授業、児童生徒に学力を付ける授業を行うために、教材研究の充実を図ることは重要である。しかし、その大切さは分かっているものの、何をどのようにすればいいのかわからないということもあるのではないだろうか。そこで、教材研究の視点を以下のように整理した。

○ 学習指導要領との関連（目標、指導内容等）
○ 学習内容の系統性（中学校は、高校も視野に入れるとさらによい）
○ 教材の解釈（指導者が教材をどのように捉えているか）とよさ
○ その教材を学習させる際に大切にしたいことや重点を置きたいこと
○ それを学ぶ意義（どんな力や態度の育成につながるのか）
○ 教科書の分析（単元構成、指導のねらいや意図、学習問題、指導上の留意点）

イ 問題解決的な学習指導過程の明確化

問題解決的な学習を確認するという意味も含め、一単位時間における基本的な流れを以下のように捉えた。また、各段階での指導の課題を整理した。

段階	学習活動	各段階における指導上の課題
導入	1 本時の学習について話し合う。 ・ 学習問題 ・ めあて	① 児童生徒の興味・関心や意欲を高めるための導入の在り方はどうあればよいか。
	2 学習の見通しをもつ。 ・ 課題解決の見通し	② どんな見通し、どの程度の見通しをもたせればよいか。
展開	3 課題について考える。 ・ 自力解決	③ 自力解決の場で、教師の支援はどうあればよいか。
	4 課題について話し合う。 ・ 小集団での話し合い ・ 全体での話し合い ・ まとめ	④ 小集団での話し合いですることは何か。 ⑤ 全体の話し合いの中で、児童生徒の思考を高めるための教師の指導はどうあればよいか。
開	5 練習問題をする。	
終末	6 学習の振り返りをする。	⑥ 自分の学びを振り返り、問題解決的な力を育むための振り返りの視点や学習感想の在り方はどうあればよいか。

ウ 指導方法の工夫・改善

(7) 学習意欲を高める導入の在り方

導入の段階においては学習意欲を高めることが大切なことである。そこでは、学習問題や事象の提示などをすることになるが、その際に大切な視点を以下のように考えた。

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| ○ 算数（数学）的活動を取り入れる。 | ○ 身近な事象と算数・数学との関わりをもたせる。 |
| ○ 前時の学習内容や既習事項との関わりをもたせる。 | ○ これまでの概念を崩す。 等 |

また、課題について自力解決を行う前に大切なことを見通しである。「見通す」段階では、一般的に「解決方法の見通し」「結果の見通し」「考え方の見通し」が考えられえる。この段階での大切な視点を以下のように考えた。

- | |
|---|
| ○ 自力解決に対する見通しは、授業者から多くの情報を与え過ぎず、ある程度の困難さを残した見通しのもたせた方がよい。 |
| ○ 学級の児童生徒の実態を具体的に把握する。 |
| ○ 問題解決的な学習に対する学び方を児童生徒に理解させる。 |
| ○ 「今までの考え方を使えば、必ず問題解決につながる」という考えをもたせるとよい。 |

(8) 自力解決における教師の手立ての在り方

与えられた課題に対して、一人でしっかり向き合う場（自力解決の時間）の確保は、課題解決の第一歩であり大切である。自力解決の時間において、児童生徒は課題を解決するために何をどのようにする必要があるのか、また、既習事項の中から解決方法を見出すことができないのかなど様々な考えをもつようになる。

その際、児童生徒が自力解決を行う上で教師の手立てが必要になってくる。自力解決の場面での教師の手立ては、教師が児童生徒の課題への取組状況を把握することである。全体を見て一人一人を観察しながら、まずは取組の状況を的確につかむことが大切である。その上で、一人一人に対して関わっていく必要がある。児童生徒との関わりについては、下の表の通りである。

児童生徒の様子	児童生徒との関わり方
自力解決できている児童生徒	○ 自分の答えを確かめるよう促す。 ○ 他のやり方でできないか促す。 ○ 説明の文章化を促す。
自力解決が途中の児童生徒	○ 賞賛し、課題解決への意欲を高める。（ここまではいいよと○をつける 等） ○ 軌道修正が必要な児童生徒に対しては、その子のつまずきに応じた支援を行う。（一緒に考える、ヒントを与えるなど）
自力解決に至っていない児童生徒	○ 課題が捉えられているか確認する。捉えられていない場合は、もう一度確認する。 ○ その子のつまずきに応じた支援を行う。（一緒に考える、ヒントを与えるなど）

(9) 思考を高める指導の在り方

児童生徒の思考は、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる過程で育成されると考える。全体で考えを練り合う場面の前に、小集団での話合いの場を設けると、その後の話合いが充実したものになると考える。

(a) 小集団での話し合い

2人または、3人一組でグループを作り考えを伝え合う場を設定し、その後の練り合いの場面に活かすことができるようにする。互いの考えを比較したり、検討したりするために、具体物や図、文章などを用いて説明し合えるようにする。

【小1「3つのかずのけいさん」ホワイトボードを使って小集団での話し合い】



(b) 全体での話し合い

友だちの考えに質問をして、分からないところを明らかにしたり※₁、考えを補ったりして、思考を高めていった。また、発問を工夫することで思考を一般化※₂していった。

【中1「円とおうぎ形」～おうぎ形の計量の授業より～】

どちらのピザが大きいか。A:半径10cm、中心角90° B:半径12cm、中心角60°	
T:今の説明に付け足しや質問はないですか。	※1
C:なぜ、1/4なのですか。	
C:(10×10×1/4×πの説明に対して黒板に図を書いて説明する。)	
T:ピザの中心角が70°、半径12cmだと面積はどうなりますか。発表してください。	※2
C:12×12×70/360×π=28πです。	

(c) 振り返りにおける学習感想の工夫

学習の振り返りを行う段階で、学習感想を書かせる活動を習慣化することで、数理的な処理のよさや見通しのもとせ方、生活や学習への活用の仕方などへの気づきを促すことができる考えた。さらに、自分の思考の過程を振り返らせることで、問題解決的な学習における学習の学び方を理解することができ、それが解決への見通しの立て方や方法を選ぶ力を育てることになると考えた。学習感想はノートやプリントへの記述とし、短時間ではあるが、できるだけ毎回確保した。単元の内容や学習活動に合わせた学習感想が書けるように、振り返りの視点を設定し、児童生徒が視点を選択できるようにした。

【振り返りの視点】

・今日の学習でわかったこと	・今日の学習で楽しかったこと、おもしろかったこと
・今日の学習で学んだ算数(数学)のよさ	・日常生活の中で役立てたいこと 等

エ 算数(数学)的活動を活かした指導の工夫

児童生徒が目的意識をもって主体的に学習に取り組むことができるようにするためには、授業における算数(数学)的活動の在り方を明確にし、その充実を図る必要がある。

算数(数学)的活動とは、作業的・体験的な活動など身体を使ったり、具体物を用いたりする活動がある。そのほか、算数・数学に関する課題について考えたり、算数・数学の知識をもとに発展的・応用的に考えたりする活動や、考えたことなどを表現したり、説明したりする活動など様々な活動が考えられる。

そこで、算数（数学）的活動について、本研究のテーマである思考力と表現力の観点から、主として思考を深める（発展・応用）ための活動と表現（説明）するための活動の2つに分類し、発達段階に応じて学習の中に取り入れ、課題解決のための支援を行うことにした。

〈算数（数学）的活動の概要と系統表の一部〉

学年	主として思考を深める（発展・応用）ための活動	主として表現（説明）するための活動
小1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 具体物を数える。 ○ 量の大きさを比べる。 ○ 形を見つけたりつくったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 計算の意味や仕方を表す。 ○ 場面を式に表す。
小4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 面積を実測する。 ○ 計算の結果の見積もりをし判断する。 ○ 平行四辺形などを敷き詰め、図形の性質を調べる。 ○ 身の回りの数量の関係を調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 面積の求め方を考え、説明する。
中2・3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 既習の数学を基にして、数や図形の性質などを見だし、発展させる。 ○ 日常生活や社会で数学を利用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 数学的な表現を用いて、根拠を明らかにし筋道立てて説明し伝え合う。

(5) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 教材研究の視点を整理したことで、算数・数学の本質に迫った指導や学習活動の工夫ができた。導入段階では、身近な事象の教材化を図ったことで、児童生徒の学習意欲の向上や確かな問題把握へとつなげることができた。
- 思考と表現を一体とした学習活動を展開したことで、互いの考えを比較したり、検討したりしながら問題を解決する姿が見られ、思考力・表現力が高まった。学習感想には、児童生徒が主体的に学習に取り組む姿や学び方を獲得していく姿が記録されていた。
- 与えられた課題に対して、一人で向き合う場を確保したが、思考が滞る児童生徒も少なくない。思考を柔軟にしたり、揺さぶったりする発問の工夫など、個々の児童生徒に応じたより具体的な支援や手立てについて、今後も研究を重ねていく必要がある。
- 練り合いの場面が、互いの計算や答えを確認するだけの場となることがあった。「どのようにして考えたか」を出し合いながら、多様な考えを一般化していけるような話合いの展開の工夫が必要である。

○ 引用・参考文献

小学校学習指導要領（文部科学省） 中学校学習指導要領（文部科学省）
 小学校学習指導要領解説国語編（文部科学省） 中学校学習指導要領解説国語編（文部科学省）
 小学校学習指導要領解説算数編（文部科学省） 中学校学習指導要領解説数学編（文部科学省）

○ 研究同人

所長	北村 秀秋（日向市教育長）	研究員	高原 麻樹（富高小学校教諭）
副所長	米谷 眞弘（学校教育課長）	研究員	加塩 勉（日知屋小学校教諭）
研究班長	山田 浩明（日知屋東小学校教頭）	研究員	福吉 恵子（財光寺南小学校教諭）
研究班長	吉永 英美（財光寺南小学校教頭）	研究員	湯川 新二（財光寺中学校教諭）
研究員	城後 誠（塩見小学校教諭）	研究員	安保 隆昭（大王谷学園中等部教諭）
研究員	佐藤 寿哉（日知屋東小学校教諭）	事務局	後藤 克文（学校教育課長補佐）
研究員	川越 葉子（東郷小学校教諭）	事務局	畑中 研二（学校教育課教育指導係）
研究員	宮本 朝美（平岩小中学校教諭）	事務局	平田 哲（学校教育課指導主事）
研究員	下村 晴美（日向中学校教諭）		